

宋元版禪籍研究（四）

——如々居士語録・三教大全語録——

椎 名 宏 雄

一

如々居士顔丙については、まとまった伝記が知られず、従来の資料では、わずかに『禪燈世譜』五や『続伝燈録』目録中に名のみが所録され、『増続伝燈録』一には短文の機縁語句一点が収録されているにすぎない。

これらの断片的な記事によれば、居士は大慧宗杲（一〇八九～一二六三）の弟子、可庵慧然の法嗣である。可庵は、『大慧語録』『大慧普說』『大慧書』などの編者でもあり、大慧門下の重鎮である。ともあれ、従来、如々居士については、大慧やその門下に参じた多くの士大夫や居士の一類型、という以上の理解がなされていない。その語録類が一般的でなく、検討が容易でなかったからである。

現在、京大図書館には、『如々居士語録』三冊（写本）があり、同じく京大図書館谷村文庫と京都両足院には、『重刊増

広如々居士三教大全語録』一冊（古刊本）が所蔵される。これらの二書は、かなり複雑な構成内容を有し、宋代語録の編集と開版の様相を知らしめる一つの好例を提供する。のみならず、本文内容も通常の語録とはいちじるしく趣を異にし、資料的にも注目すべきと思われる。したがって、以下これら二種の語録について、書誌的方面を中心に紹介を試みたい。

二

まず、京大本『如々居士語録』は、三冊から成り、奥書や識語等は存しないが、室町期の古写本と推定される。『禪籍目録』は、何にもとづいてか、本書を一五巻とするが、これは誤りである。煩瑣ではあるが、三冊全体の構成内容を以下に列挙しよう。①②……などは、後述の『三教大全語録』との対応を示す符号である。

第一冊〔天〕

如々居士語錄 甲集

序 紹熙五年(一一九四)、謝師稷撰……………①

卷一 諸文門上……………②

卷二 諸文門下……………③

卷三 伝燈門……………④

卷四 証拠門、詩頌門

如々居士語錄 乙集

卷一 音声仏事門

卷二 放生科儀門、施食科儀門

卷三 陳意致語門、一年致語門

卷四 諸般廻向文、引亡魂入浴門

卷五 追薦疏意門、涅槃法語門

卷六 諸家伏願門、拋偈祝願門

第二冊〔地〕

如々居士三教語錄 丙集 惟進等編

卷一 修礼六時淨土文語門、見尊宿參問門

卷二 泉城講經門

卷三 聖誕疏門、妙題善會門、伏願懺悔門

卷四 開堂疏門、化披剃門、化法衣門、水陸門、追薦疏門

卷五 化縁起造門、雜化門、化齋粮門、化橋路門

如々居士三教語錄 丁集 慧進編

卷一 頌儒教門

卷二 頌道教門

卷三 頌釈教門上
卷四 頌釈教門下

第三冊〔人〕

如々居士増入丹霞先生語錄 戊集

卷一 諸論世文門

卷二 論世詩偈歌頌門

卷三 同

卷四 論世歌頌門

卷五 器物贊偈門、題訪警誡門、涅槃法語門、論世勸誡門

卷六 論世警誡門、警世歌頌門、化縁疏

如々居士語錄 己集

卷一 修行方便門……………⑤

卷二 善惡勸戒門……………⑥

卷三 齋疏門、吉凶燈疏門……………⑨

卷四 諸牒疏語門、序跋諸語門……………⑩

致語口号門

如々居士坐化語錄 庚集(別集)

序 嘉定五年(一二二二)、翕聞中撰

卷一 坐化門

卷二 坐化門……………⑦

卷三 拾遺……………⑧

卷四 六道輪廻門……………⑪

卷五 薦拔門、諸般廻向門

右の京大本のは、他に異本の知られぬ天下唯一本として貴重である。京大本の特徴は、甲集より庚集におよぶ全七集となつてゐる点にある。しかもそれは、語録の題名・編者名・序文、などの相違や存否により、少なくとも四回にわたつて編集されたとみられる語録類を集大成している。すなわち、まず甲集と乙集は、紹熙五年（一一九四）に謝師稷の序文をもち、この年に刊行された語録とみられる。編者は不明であるが、甲集は「見性成仏直指」や「初学坐禅法」などの作品を中心とし、禪者としての面目豊かな語録から成る。

次の丙集と丁集は、「三教語録」とされ、「住獅子峯参学小師僧慧進」の編者名がみられるから、別個の編集なることが知られる。内容は、丙集が仏法要の際における疏文が主であるのに対し、丁集は儒（五三頌）・道（五〇頌）・仏（二〇〇頌）の各公案に付頌した珍らしい作品である。また、戊集と己集は「増入丹霞先生語録」とされるから、前記の甲乙、または丙丁の、いずれかに対する増入編集である。内容的には、在家を対象とする小品の集録であるから、甲乙集の補遺とみてよい。如々居士は、丹霞先生とも呼ばれていたのである。

次に、庚集の「坐化語録」は「別集」ともされ、嘉定五年（一二二二）に兪聞中の序文が付けられることから、文字通り別個に編集刊行されたことのある語録とみられる。内容的には、如々居士が牛頭山獅子峯（福建省古田県）に住した際

の入院開堂の疏や問答語句、および上堂等の語句を中心とし、禪者としての本格的な語録とみるべきものである。庚集の語録の大半は、のちに『三教大全語録』にも採録される。かくして、京大本の七集は、

- (一)、甲乙（一一九四編）一〇巻……
 - (二)、戊己（後に(一)を増補）一〇巻……
 - (三)、丙丁（別に編集）九巻……
 - (四)、庚（一二二二編）五巻……
- ↓七集

のごとき四つの編集語録、全三四巻を集めた総集であつた。これが刊行されたのかいなかは不明であるが、あたかも、東福寺の『普門院経論章疏語録儒書等目錄』中には、閏字函中に、「如々居士語 三冊 又一冊」とみえ、また、光字函中には、「如々居士語 七冊」とある。つまり、鎌倉期には、如々居士に関する何種かの語録が将来されていたのである。就中、七冊本は京大の七集三冊本と対応するものであろう。

三

次に、谷村文庫に両足院とに存する『重刊増広如々居士三教大全語録』は、上下二巻一冊の古刊本であるが、従来、谷村文庫本は元版とされている。刊記や刻工名がみられぬものの、古い紙質や刻字体の美しさ、端正な版式などから、元版とみなされてきたのであろう。ところが、たまたま谷村文庫

本が欠いている目録第三丁目の表に、兩足院本では明瞭に「洪武丙寅孟春／翠巖精舍新刊」なる刊記が存在するのである。谷村文庫本と兩足院本とは、版式が完全に一致し、文字や匡郭の摩滅個所さえも等しく、まったく同一版なることは明らかである。洪武丙寅は洪武一九年(二三八六)で明初であるから、元版とはいえぬ。谷村文庫本の欠丁は、ある意図のもとに刊記の部分が削除されたものとみられる。

本書の、内題における「重刊増広」とはなにか。これを知るため、本書の内容構成を、順に番号を付して示そう。

〔卷上〕 ①序 ②諸文門上 ③諸文門下 ④伝燈門 ⑤修行方便門 ⑥善惡報応門 ⑦因由門

〔卷下〕 ⑧偈頌雜著門 ⑨齋疏門 ⑩誥牒門 ⑪六道輪廻門

⑫諸天世界門 ⑬劫数世界門

右の各部門と、前述の七集本との対応は、すでに示したとおり、②～⑪までは七集本『語録』の粹といつてよい。つまり、『三教大全語録』は、甲集の①②③④を骨子として、これに己集から⑤⑥⑨⑩、庚集(別集)から⑦⑧⑪、の各門を採り、新たに⑫⑬の二門を増広したのであろう。ゆえに、

「重刊」とは『三教大全語録』そのものの再版を意味するのではなく、甲集の序文①を巻頭に置くことから、甲集を中心に増広再版する意図を示すものであろう。「翠巖精舍新刊」の六字も、それを傍証する。翠巖は福建の寺とみてよい。

かくして、如々居士の語録は、宋代に幾度かの編集・刊行の歴史を経て、明初にその粹が重刊されたことを知る。この語録が流行した理由は、「初学坐禅法」のごとく、平易な在俗者向きの禅法の開示が豊富に存すること、祈雨や禳災の際の唱文を収める「陳意教語門」や、季節・男女・職業等の別による香語集「涅槃法語門」などのごとき、仏教儀礼・民間行事一般に関する語句を網羅していること、の二点に尽きよう。これが、便利な書として、宋代以降の在俗知識人たちに喜ばれたのであろう。序者の謝師稷は福建平江府の、兪聞中は同じく黎州の、いずれも知事の地位にある人々であつた。

しかし反面、本邦では、本語録は、わずかに金沢文庫に「初学坐禅法」などの古写本がみられ、無著の『禅林象器箋』に授用されるのを例外として、流布した形跡はさらない。本語録が、本邦では傍系とみられた大慧派の、しかも在俗者による、ほぼ三教にわたる通俗的な語録であることが、純粹性を尊ぶ邦人の関心と呼ばなかつたのであろう。

しかし、本語録により、如々居士の経歴や、比較的に資料の乏しい大慧派の思想禅風が補われる。さらに、語録中、仏教儀礼や民間行事に関する項目が少なからず存し、宋代の福建地方における斯方面の研究に益する。現今、台湾に残るかかる方面の実態と対応すれば、その資料的価値は、さらに新たな意味をもつてあろう。

(駒沢大学講師)